

平成27年度 奈良県子ども読書活動推進会議議事要旨 (案)

日 時 平成27年7月28日(火) 午前10時～正午

場 所 奈良県庁北分庁舎1A会議室

出席者	奈良県くらし創造部次長(議長)	吉田 晴行
	奈良県図書館協会公共図書館部会代表 (奈良市立中央図書館長)	松田 義秀
	奈良県学校図書館協議会代表 (奈良市立佐保台小学校長)	荒木美久子
	奈良県学校図書館協議会 奈良県高等学校図書館研究会代表 (県立高円高等学校長)	足立 有司
	奈良県都市教育長協議会代表 (橿原市立図書館長)	森本 宰齊
	奈良県町村教育長会代表 (大淀町立図書館長)	松本 昌也
	民間団体ボランティア代表 (奈良子どもの本連絡会)	井上 幸子
	学識経験者 (奈良教育大学教職大学院教授)	松川 利広
	奈良県立図書館情報館副館長	名草 康之
	奈良県教育委員会事務局学校教育課長	大西 英人
	奈良県教育委員会事務局人権・地域教育課長	筒井 昭彦
	奈良県くらし創造部青少年・生涯学習課長	森 啓

○会議の公開について

- ・本会議は、「奈良県子ども読書活動推進会議公開の取扱い」及び「傍聴要領」を規定している。この「取扱い」により、会議は原則公開とし、開催に際しては傍聴席を設け、終了後は奈良県ホームページにて議事録を掲載する。

○議長挨拶

○委員紹介

○議事要旨

(1) 平成26年度事業報告

①子ども読書活動推進会議について

平成26年度は、7月22日に当会議を開催した。平成22年度に取りまとめた「奈良県子ども読書活動推進計画－5年間の成果と課題－」をもとに、平成26年度の推進方針について、議論した。

②「子どもの読書活動推進」啓発ポスター募集事業について

平成24年度から始めた事業。小・中・高あわせて447作品の応募があった。審査会でそのうち20作品を優秀作品とし、県内施設での展示等、啓発に活用した。

③子ども読書活動推進講座について

子ども読書活動推進を目指した講座。この講座は、図書館関係者・読み聞かせボランティア等を対象に、講義・実践の形で行っているもの。昨年度は人権・地域教育課主催で4回開講し、計131名の参加があった。

④子ども読書活動推進会議専門部会について

平成26年10月27日、子ども読書活動推進会議の専門部会を開催。専門部会では、子ども読書活動優秀実践図書館・団体に対する文部科学大臣表彰の推薦に関して協議し、奈良県からは奈良市立西部図書館と河合町おはなし会を文部科学省へ推薦した。今年4月には、文部科学大臣の表彰が決定し、国立オリンピック記念青少年総合センターにて表彰式が開催された。

優秀実践校については、毎年学校教育課において選考・推薦を行っている。

⑤子ども読書活動推進フォーラムについて

平成27年3月6日、平成26年度子ども読書活動推進フォーラムを実施した。かしはら万葉ホール視聴覚室において「橿原市における子ども読書活動の取り組み～地域・学校・図書館の連携を目指して～」と題して、平成20年に子ども読書活動推進計画を策定された橿原市におけるその後5年間のまとめならびに地域の学校やボランティア団体の方々の取り組みをご報告いただき、34名の参加があった。

(2) 平成27年度事業計画

- ・ 昨年の会議において、今後市町村の推進計画策定に向けての支援や積極的な子どもの読書活動推進の啓発に取り組んでほしいという意見をいただいた。本年も、この方針に沿った事業の展開を考えている。

①市町村の子ども読書活動推進計画の策定について

本県では、平成26年度末で12市町村が計画策定済み、策定率は30.8%となっている。これは、全国平均69.1%を下回っており、今後も市町村への支援を継続していくことが必要である。なお、資料8では、策定作業中は8市町村となっているが、宇陀市は3月末に、また葛城市は6月末に計画策定を完了され、推進

計画の冊子をお送りいただいた。県として、他の策定作業中の市町村も含め、策定作業が速やかに進むよう、これまで策定された市町村の情報を提供するなど、支援したい。

② 子どもの読書活動推進「啓発ポスター事業」について

昨年に引き続き、今年も啓発ポスター募集事業を実施する。現在、県内各学校に応募要項やチラシを配布し、作品を募っている。

③ 「絵本ギャラリーin 奈良」参加

昨年度のポスター優秀作品20点の縮小版を「啓林堂書店」で展示中。8月1日、2日の「絵本ギャラリーin 奈良」や8月には県立教育研究所において展示を予定している。

ポスター審査会は10月末頃の予定。昨年同様、奈良県高等学校図書館協議会代表、奈良県学校図書館協議会代表、学識経験者、奈良県教育委員会事務局人権・地域教育課所属教員、学校教育課所属教員、及び当課課長で審査を行う。優秀作品の展示は、11月30日から県庁屋上ギャラリーで、12月15日からは県立図書情報館において行う。また、県立教育研究所等県の各施設ならびに市町村立図書館等において展示する予定である。

④ 子ども読書活動推進会議専門部会について

子ども読書活動推進会議専門部会の開催は、文部科学省からの通知に基づき開催している。通知時期が一定しないので「時期未定」となっているが、年末か年明けには、平成28年度の子ども読書活動優秀実践図書館・団体に対する文部科学大臣表彰推薦について協議していただく予定。推薦に関しては、毎年県立図書情報館、各市町村図書館等にご協力いただいております。今年度もよろしくお願ひしたい。

⑤ 子ども読書活動推進フォーラムについて

子ども読書活動推進フォーラムは、2月下旬の開催を予定している。子ども読書活動推進のため活動されている方が、実践に役立つ情報を得られる内容になるよう検討を行い開催したい。

⑥ 子ども読書活動推進講座について

一昨年から県教育委員会事務局人権・地域教育課家庭・社会教育係が主催で実施している子ども読書活動推進講座については、本年度も引き続き、読み聞かせボランティア等を対象に、講義・実践のかたちで行う予定。

○意見交換

県教育委員会の取り組みについて

○奈良県教育委員会事務局学校教育課長 大西英人委員

- ・読書活動について、学校ではどうなっているか説明する。学校での指導の中心は、やはり国語科である。平成23年度から小学校で現行の学習指導要領が実施され、中学校がそれに続き、小中高と新しい学習指導要領となった。その中で言語活動の充実がうたわれ、国語科だけでなく、あらゆる教科でいかに自分の考えをまとめていくか、また、どのようなかたちで分析したりするかなどに取り組んでいる。それに連動する形で、読書活動が重要視されてきた。県から指導主事が要請訪問として学校へ出向く

時は、読書活動の充実ということを踏まえながら話をしている。

- ・読書に関する奈良県の生徒の様子について説明する。文部科学省が学校図書館の現状に関する調査の結果を6月に公表した。加えて、平成26年度全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙の結果にも、読書についての項目があがっている。それらによると、「読書が好きですか。」という問いに、奈良県の小学生の71.2パーセントが「好き」と答えている。全国平均が73パーセントで、ちょっと奈良県の方が低い。中学生は、64.1パーセントが「好き」と答えている。全国平均は69.4パーセントで、47都道府県中、45位となっている。全国平均と数値に大きな差はないが、いずれも低位である。
- ・学校での読書活動については、全校一斉の読書活動を数年前から実施していただいている。小学校では、203校中194校で、中学校では、105校中73校で継続して実施していただいている。毎日実施している学校ばかりではないが、何らかの形で全校生徒が、1日10分なり15分の読書活動に取り組んでいる。
- ・次に、「読書はどれくらいしますか。」という問いには、小学生で「1日2時間以上読書をする。」子どもであるが、奈良県は8.0パーセントである。全国平均は7.6パーセントなので、これは奈良県の方が多くなっている。ただ、「全く読まない。」という子どもの割合が21.3パーセントあり、全国平均が19.3パーセントなので、奈良県の小学生の場合は、読む子はものすごく読んでいるが、読まない子は全く読まないという状況にある。この傾向は中学生になるともっと激しく、中学生の6.2パーセントが「2時間以上読む」が、「全く読まない」というのは39.7パーセントとなり、5人に2人は全く読まないという状況である。中学校の全国平均は、「2時間以上読書をする」が6.7パーセントとなっている。せっかく小学生のときには全校平均より上なのに、中学生になると全国平均を下回っている。「全く読まない」という子どもは、全国平均34.3パーセント、奈良県は39.7パーセントである。
- ・また、「図書館に行きますか。」という問いについては、奈良県の小学生の34.5パーセントが「ほとんど又は全く行かない」。全国平均は、29.2パーセントである。中学生は、67.7パーセントが「ほとんど又は全く行かない」。全国平均は、58.2パーセントとなっている。この中学生の図書館にほとんど行かない率は、全国で一番高くなっている。数字で見るとさほど大きな差は感じられないが、微妙に差があって低位に甘んじているように思う。
- ・高等学校には、現在司書教諭を12学級以上の学校に配置している。できるかぎり司書の研修もし、ICT化も少しは進んで来たので、図書データベースなどのシステムの整備も進み、調べ学習などの取り組みも本格的に進めているところである。ただ、小中高ともに蔵書数は、全国平均より低位である。学校による差や市町村における差もあり、なかなか一律にはなっていない状況である。
- ・平成25年までは、「ノーテレビ・ノーゲームデーチャレンジ」に取り組んでいた。「読書をしましょう。」「家庭での会話をしましょう。」ということを進めてきた。事業は終了したが、継続していただいている学校もある。ただ、ゲームやテレビも最近はその逆の流れがあって、ゲームやテレビで有名になったものが本になり、それに興味を持つ子どももいる。ゲームばかりに時間を取られてしまうとマイナスであるが、本を手

に取るきっかけになるのではないかと考えている。

- ・これからも、学校教育課として、積極的に読書活動の啓発に努めていくつもりである。

○奈良県教育委員会事務局人権・地域教育課長 筒井昭彦委員

- ・人権・地域教育課は、4つの分野の教育施策を担当している。まず1つ目は人権教育、2つ目は地域教育、これは、学校と地域が協働して子どもを育てるという環境を作っていくことである。3つ目が家庭教育、4つ目が社会教育という4つの分野を所管している。子どもの読書活動の推進という観点から言うと、2つ目の地域教育と3番目の家庭教育、4つ目の社会教育の3つの分野で取り組んでいる。
- ・地域教育の取り組みは、学校と地域との協働であり、子どもが地域へ貢献する活動と、地域の人々が学校へ支援するという2つの側面を有している。いずれも、子どもたちが多様な経験と豊かな学び、様々な人々との交流を通して、子どもの自尊感情や社会性などを育てようというものである。1つ目の側面である子どもが地域へ貢献するという活動では、高校生が小さな子どもを対象としたイベントで、読み聞かせにチャレンジすることや、保育所、幼稚園に出向いて読み聞かせを行う取り組みを行っている。高校生はこの体験を通して、又、子どもたちの喜ぶ姿を見て、絵本のすばらしさを実感することもできるし、自ら学ぶこともできる。2つ目の側面である地域の人が学校へ支援するという活動については、PTAや自治会の人に限らず、子どもたちの学びを豊かにするという観点で、いろいろな人とつながってくださいと研修会などで呼びかけている。図書館とか社会教育施設とか、読み聞かせの民間ボランティアさんとながることによって、子どもたちの学びが豊かになるということを呼びかけている。
- ・家庭教育からのアプローチにも2つの側面がある。1つは、幼児や小学生の低学年の家庭を対象に月間目標を設定し、幼稚園、保育所、学校にお願いし、その月間目標をPRしていただくとともに、ホームページで情報発信している。7月は「本をたくさん読もう。」という月間目標を設定し、その浸透に力を入れている。また、家庭教育のもう1つの側面は、次代の家庭教育を担う高校生に、家庭教育の重要性を分かってもらうため、家庭教育について学ぶチームに参加しませんかと広報し、応募してきた高校生でチームを結成している。毎年100名から140名程度の高校生の参加がある。そこで、集まった高校生に、家庭教育というのは大切であると語りかける。その取り組みの中で、読み聞かせをテーマに取り上げ、高校生に体験してもらう。さらに、そこで学んでもらったことを小さな子どもたちを対象としたイベントの中で実践してもらっている。この高校生を対象とした研修を7月12日の日曜日に奈良市立中央図書館の協力を得て、読み聞かせの研修会を開催させてもらった。
- ・社会教育からのアプローチは、資料1と資料7の実績報告と計画の中で紹介された。資料7のとおり、子ども読書活動推進講座としてボランティアさん対象に読み聞かせの講座を実施している。

県くらし創造部の取り組みについて

○奈良県くらし創造部青少年・生涯学習課長 森啓委員

- ・子どもと大人でつくる地域のつながり事業について説明する。本県の子どもたちの規

範意識が低い状況を克服するために、地域の連帯感やコミュニティー意識を高め、地域で子どもを育てる力を高めるために、地域の子どもと大人が一緒になって行う様々な活動を支援する事業である。

- ・この事業の1つに、プログラム提供型がある。これは、NPOやおはなし会のグループなどの団体がプログラムを事前に提供し、それを地域のグループが使って活動をするという事業である。その中の「読書」という欄を重視し、多くのグループに参加していただいている。この事業で、地域の子どもを育てる力の高まりを期待している。また、野外活動センターでは、「森の幼稚園」という自主事業を行い、子どもたちに本の読み聞かせなどの取り組みも行っている。
- ・子ども読書活動推進計画については、その策定をどのようにすれば良いか考えた。予算も無く、少ない人数で最大限何が出来るかを考えていたとき、この会議の委員をしていただいた一人の委員から、地域で読書計画を策定することによって、子どもの読書活動が進んだという話をここで聞いた。なるほどと思い、市町村の推進計画の策定を進めるため、過去の資料を参考に推進計画策定マニュアルを作り、それを持って各市町村に出かけ、啓発を行った。その結果、推進計画を策定していただいた市町村も増加した。現在、いくつかの市町村において策定に向け取り組んでいただいている。
- ・読書活動推進計画は、市町村において、学校、図書館、ボランティアの皆さんのそれぞれの連携が図れるものであり、1つのテーブルについて議論することが重要で、その中で課題を見つけ出し、各市町村でできることから積み上げていけば読書活動推進につながると考え、アドバイスをしている。このことで、市町村のハードルが少し低くなり、子ども読書活動推進計画の策定につながれば良いなと思っている。

県立図書情報館の今後の課題

○奈良県立図書情報館副館長 名草康之委員

- ・県立図書情報館は平成17年11月に開館し、今年開館10周年を迎える。これを機会に抱えている課題を解決していきたいと考えている。課題は何かと言うと、平成22年度に来館者が年間59万人あり、これが最高で、昨年54万人、一昨年は55万人となっている。当初目標は30万人にしていたので、その倍ぐらいの来館者はあるが、流れとしては減少傾向にある。当初から図書館と情報が交流する場ということで、年間100回のイベント、70回の展示会など実施しているが、もっと違うことも計画して行く必要がある。
- ・先ほど図書館に行かない子どもが多いという話があった。平成26年度全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙の結果によると、「図書館に行きますか。」という問いに対し、小学生は34.5パーセント、中学生は67.7パーセントで全国1位となっている。これに関する図書情報館としてのデータは無いが、顧客満足度調査を実施している。そこに回答している人は、人口比率に沿った人数になっている。ただ、小中高校生のニーズに合う内容があれば、数値がアップしても良いところだが現れてこない。
- ・図書情報館の子どもたちに対する位置づけはどうかと言うと、子どもたち向けの図書館ではなく、調査研究向けの図書館である。ただし、例えば最先端の子どもたち向け

の取り組みや試しにすべきことはあると考えている。10周年を節目として、子ども向けの研究を今年はできればと考えている。その一例として、子ども図書室を利用し、ボランティアさんの協力も得ることができればと考えている。

- ・そのような中、人権・地域教育課では、高校生が地域で読み聞かせを学ぶ場を計画されている。それを図書情報館で実施するとすればどのようにできるかなど、この会議に参加することにより、色々な着想が得られるのでありがたい。また、青少年・生涯学習課が、市町村の推進計画の策定が進むよう色々努力されている。県がバックアップすることは大切なことであり、県本来の姿でもある。図書情報館も最先端のことをすすめる中で、市町村の図書館・地域と連携しながら、地域に参加する高校生を支援していきたい。

図書館での読書活動推進について

○奈良県図書館協会公共図書館部会代表

奈良市立中央図書館長 松田義秀委員

- ・今、公共図書館において、今後の図書館の在り方、生き方など、改革が求められている。子どものおはなし会についても、今までは、学校の職員会議の関係で、子どもが早く帰宅する水曜日開催していたが、家庭においては、その日に塾へ通ったり、習い事をさせる時間に充てている。そのような状況があるので、今年から、おはなし会の開催曜日を土曜日と日曜日にし、家族で来ていただけるよう設定し直し、以前のように子どもたちを集めたいと取り組んでいる。また、保護者から、子どもたちが狭い部屋に閉じ込められて、どんなことをしているか分からないという話を聞くので、おはなし会をオープンスペースでも実施している。オープンスペースでおはなし会を開催すると、子どもたちが、ほかのところで本を読んでも、その声は届くので、子どもたちに動機付けができる。これまで公共図書館として、打つ手は打ってきている。一方、まだまだ学校図書館との連携が行き届いていないので、その辺は丁寧にやっていかなければならないと思っている。
- ・先ほど、公共図書館に行かない子どもの話があったが、学校図書館の利用について統計をお持ちでしたら教えていただきたい。奈良市内の中学校に聞くと、学校図書館の利用はどうしても昼休みとか放課後に限られるが、塾とかクラブがあって利用できないという生徒の割合が増えてきていると聞いている。全県的にも同様のことがあるのではないか。
- ・近年、ICT教育が叫ばれ、タブレットで授業するようになってきた。ICT機器を見る時間帯が多くなり、活字は見ているが、紙ベースの本を見たりすることが少なくなっているように思う。また、高校生が読み聞かせをしている様子を見る機会があったが、そこでは、高校生が恥ずかしがることなく、どんどん普通に本を選んで子どもに読み聞かせをしている状況があった。あのパワーというのはすごく活用しがいがあるなと感じた。小さい子どもたちにとっても年齢が近いので親しみを持っている。中学生が職場体験等で図書館に来ることがあるが、体験実習の中で感想を書いたりすることもあるので活字から離れているという訳では無いと感じている。
- ・以前、本屋さんで話を聞くと、小学校で本に親しんでいれば、中学校になって忙しく

て本から離れることになっても、高校・大学で時間ができれば、また本に戻ってくるという状況があるのではないかという意見であった。本を読まないから、本から離れているのではなく、色々な事情や状況があって本から離れてしまっている。これから、図書館として、子どもたちが再び本に戻れるようなきっかけづくりを心がけていきたい。

○奈良県都市教育長協議会代表

橿原市立図書館長 森本幸齊委員

- ・図書館では様々な事業を行っているが、その裏には、図書館に携わっていただくボランティアの方々の活動は欠くことはできない。ボランティアの方々に大変お世話になっている。しかし、そのことは内部外部両方合わせてなかなか伝わっていない。たとえば、ホームページでイベントを掲示させて頂いても参加者が集まらないことがある。図書館そのものの在り方についても改革できる部分もあるように思う。図書館が敷居の高いところになっているのではないかとと思うが、一方で、それを求める風潮もあるので、「くつろいで過ごせるような所にしましょう。」という方向には行きにくい。
- ・図書館は調査研究のための施設であるというのが本筋であるが、その中で、子どもに対する読書活動というのも一つの重要な役割であると思うし、その中に福祉的な要素も含んでいるように思う。それは、イベントをすることによって子育ての一助になっている部分があるのではないかと考えている。毎年「親子手づくり絵本」を実施しているが、親子で来てイベントに参加していただいた方々に、親と子が一緒に1つの物語を考えて絵本を共同作業で作成する中で、親子のつながりを深めることができる。毎日の親子の生活の中では些細なことであるが、一つの援助につながっているという気がする。だからといって、虐待が減ったかということ、数字には現れてこないが、子どもを中心に考えるのであれば、このような福祉的なことを意識しながら取り組んでいかなければならないと思う。

○奈良県町村教育長会代表

大淀町立図書館長 松本昌也委員

- ・図書館でおはなしの会を開き、子どもたちに本を読んで聞いてもらう機会を設けている。本町に「さわる絵本の会」というボランティアの会があり、障害を持っている子どもさんにどんどん活動をしていきたいと言っている。ただ、図書館を利用する保護者、子どもさんが固定化しているという現状にある。
- ・大淀町の図書館を知って、利用してほしいという思いから、図書館ボランティアの皆さんと協働し、図書館祭りや読書活動を軸としたいろんなものづくり、体験教室などのイベントを年2・3回計画し、実施している。こういう取り組みから、図書館を知り、図書館に足を運び、読書をしてもらえるようなきっかけになればと思います。
- ・もう一点は、ボランティアの方々が図書館、学校、幼稚園、こども園等に出向き、子どもたちへの読みきかせの活動を続けていただいている。回数としてはまだまだ少ない状況である。これまでから、教育委員会と学校と図書ボランティアの皆さんと連携し、取り組んできたが、まだまだ、大淀町の図書館は利用者を待っている状態である。

交通状況もあるが、より一層、地域の学校や公民館等へ出かけ行く必要があると考え
る。今後は地域へ行く図書館ということを念頭に組み組んでいきたい。

学校図書館への司書配置について

○民間団体ボランティア代表

奈良子どもの本連絡会 井上幸子委員

- ・ 13年前まで箕面市に住んでいて、豊中市と箕面市両方の図書館でお手伝いをしたこともあった。その当時から大阪ではすでに、小中学校に学校図書館専任司書が配置されていた。それまでから、学校図書館を見ていると、専任司書が配置されることで、子どもたちがどんどん本を読むようになるし、学校図書館が見違えるように生き生きしてきた。司書が配置される前と後の検証もしたが、やはり司書の配置は必要なことだと思った。
- ・ 奈良に来たとき、学校図書館に司書の配置がなく、すごくショックを受けたのを覚えている。子どもたちは、平等に教育を受けられるはずなのに、奈良の子どもたちはかわいそうだと思った。学校図書館、公共図書館を何とかしたいと考え、奈良子どもの本連絡会に入り活動してきた。今日、話を聞くと、それぞれ色々なところで頑張っておられるので頼もしく思った。
- ・ 子どもたちが小、中学校の大切なときに一番長く生活するのが学校である。その学校の図書館がもっと充実することを願っている。
- ・ 奈良子どもの本連絡会に「野の花ぶんこ」というボランティアの会がある。今日、富雄北小学校で、富北コミュニティースクールという取り組みがあり、おはなし会に始めて参加している。そこでは、お茶やお花など色んなことを地域の大人が教えている。今日の催しの開催に先立ち参加募集すると、夏休みにも関わらず84人の申込があったようだ。保護者も参加するのでかなり大人数になるようだ。このような取り組みが県内にもっと増えればいいなと思っている。
- ・ 現在は、平群町と生駒市に司書配置が進んでいると聞いているが、奈良県のすべての学校図書館に専任図書館司書を配置してほしい。子どもが学校にいる間はずっと図書館が開いているように願っている。

学校現場での読書推進について

○奈良県学校図書館協議会代表

奈良市立佐保台小学校長 荒木美久子委員

- ・ 私が学校図書館に関わったのは、平成元年からである。当時の学校図書館は、読書センター、学習センター、資料センターとしての機能が求められていた。それが、自己教育力ということが重視され、読書センターとか学習情報センターという機能が求められるようになった。奈良県学校図書館協議会における、これからの学校図書館は、松川先生にご指導をいただいたラーニングコモンズに視点を変えていく方向を考えている。来年、平成28年8月4日・5日に、近畿学校図書館夏季セミナーが開催される。約300人が学校図書館について実践交流や研修を行う予定をしている。よろしくお願ひしたい。

- ・さて、皆様方のお話を伺っている中で、私が最近興味をもった調査がある。それは、文科省が4月に発表した、高校生の読書実態を調査したものである。中身は、高校生が本を読まないのはどうしてだろうか。どのようにすれば高校生が本を読むようになるだろうか。というものだが、本を読まない高校生への、何のために読書をするかという問いに対しては、言葉が増えるとか、豊かな人間性を創るとか、読書を難しいものにとらえているので、なかなか本に手を伸ばすことができないという実態があるのではないかと考察されている。そして、今、話題の電子書籍だが、それに対して高校生全体が、便利なものではあるが、目が疲れるとか、全体を見渡せないとか否定的にとらえているので、新しいものができたからといってすぐに学校現場に導入するということが効果的かということ、それには疑問的であるとしている。
- ・次に、日常的に本を読む高校生の実態を探ると、中学生以降も家庭で読書に関する話題が持たれている、高校生になっても家族で本の話をするという調査の結果が出ている。このあと松川先生がこの調査結果に対する考察を述べられるかもしれませんが、いま、奈良県の行政各課で行っている施策を聞くと、この調査のデータを参考にできるのではないかと思う。たとえば、今年、家庭教育として7月に「本をたくさん読もう。」という月間目標を出された。例年であれば、読書週間を踏まえた9月か10月に発表されていたと思うが、今年は7月に発表されたということは、夏休みを踏まえて保護者に対し、子どもと本を読もうという視点があったのではないか。そういう意味で非常にタイムリーな月間目標であったと思った。この月間目標を本校の校長だよりに掲載するとともに、学校の玄関掲示板にも貼っている。校長だよりはホームページにも掲載している。
- ・市町村の読書活動推進計画の策定に、青少年・生涯学習課長が努力されていることを聞き、頭が下がる思いである。底上げということでは、計画が作られてない市町村がだんだん減ってくると、自分の所に推進計画がないことに対して危機感を持ち、計画策定に一步進むのではないかなと思った。推進計画の策定については、前にも申し上げたが、ある市では、推進計画は作ってはいるが、たとえば「読み聞かせとは」という、今ではポピュラーな読書の支援に注釈を付けている状況があり、寂しいかぎりである。新しい計画をつくり出していかなければならないと考える。
- ・橿原図書館さんでは、親子手作り絵本をされているとか、大淀図書館さんでは、親子連れの固定化から打開する策を色々考えておられるのは、先ほどに戻りますが、高校生が本を読む、本を読む高校生は家庭での読書と言うところに繋がっているのかなと思った。
- ・全国学校図書館協議会が毎年行っている読書調査で、昨年は高校生の不読率が少し減少したというデータがある。それは、やはり全校一斉読書が功を奏しているのではないかと考察されている。小、中、高校の学校図書館でなされる取り組みであるが、これからも、子どもたちが読書に親しみ、学ぶ主体となれるように学校図書館教育をすすめていきたい。

○奈良県学校図書館協議会 高等学校図書館研究会代表
奈良県立高円高等学校長 足立有司委員

- ・私が最初に教壇に立った頃に比べ、生徒が本を読む機会が減ってきていると思う。学校では、朝の読書、総合的な学習の時間に図書館を使って調べもの学習をする。自ら課題を見つけて、その解決方法を学んで、調査したり研究したりする。そのため、図書室で資料を借りたり、図書室で調べたりと図書室を活用している。しかし、授業をして一番思うのは、生徒は本に出ている言葉を知らない。そして文章表現が苦手で、長文で自分の考えを述べるのが非常に苦手である。
- ・毎年、読書感想文という課題を夏休みに与える。とにかく本読むこと。読んで感想を書くように指導する。生徒の中には、インターネットから引用したり、本を見ないでその本のダイジェストを書いてしまったりという例はあるが、実際に感想文の選考をしていると、素直に感想を書いている生徒も多い。一方、本を読まないし、スマホを片時も離さず、スマホを持ったまま寝るような生徒もいる。本を読んで、そのまま本を持って寝ているのではなく、スマホに持ちかえ、スマホですべてのコミュニケーションを図っているつもりだろう。
- ・だからといって、生徒が読書をしないのかというと、そうでもない。日頃、生徒が我々の話を聞こうとする態度はきちっとしているし、個人的に話をして同様に感じる。今は、授業の一つに、「発達と保育」という教科が設定されているので、保育園へ行って園児たちとふれあう機会がある。その様子を見てみると、非常に熱心に取り組んでいる。それぞれの生徒は、暖かいものを持っている。ただ、それをどういう形で広げていけばよいのか難しい。前任校では、ビブリオバトルに取り組んでいた。それは、図書委員の生徒が中心となって運営していた。
- ・高等学校は司書の配置がされているので、図書館の管理や整備も含め熱心に活動していただいている。いかんせん、生徒は大変忙しくしている。本校は専門学科を持つ学校なので、クラブや講習等で夏休みでも生徒は毎日登校している。そんな中で、本を読み、自分の知らないことを本で調べる。生徒にレポートを書かせるので、総合的な学習の時間に必要とき本を読む、また、インターネットの情報をベースに調べたいときに読書をするが、そのようなことでは、本のおもしろさはわからないと思う。
- ・日頃から本を読んでいる生徒も多い。本校は女子の生徒が多く、電車やバスの中で文庫本を読んでいる生徒も多数いる。その生徒達が学校の中で読書ができ、図書館をおおいに利用できるようなきっかけを提供できるようになることが今の課題である。どうするのが一番よいか、図書委員を中心に活動するのがよいか、なかなかいい案はない。
- ・一方、教員の問題もある。40数名の教員がいるが、それぞれ色々な活動に携わっている。図書の専任の文化図書部は置けないので、分掌の構成上、特別活動部に図書という担当を置いて、その先生に図書の専任として仕事をしていただいている。生徒の読書に対する意識付けや、本のおもしろさを伝えるのは、国語の教師だけでなく、すべての先生が担う必要がある。したがって、夏の読書感想文の文章は、すべて担任が見ている。

読書について思うこと

○奈良教育大学教職大学院教授 松川利広委員

- ・今日、「うんてい」を見せていただいた。これは、奈良県立図書情報館の冊子で、そこに千田館長さんが「図書館のある生活」という大変奥の深いことを書かれている。しかし、あまり難しく考えないで、こちらに書いているが、「どちらへ」と聞くと「ちょっと図書館へ」だとか、「何の用」と聞くと「子どもがこれで帽子を作ってほしい」とか、「ちょっとトイレを借りるよ」とか、そういうのも含めて、図書館を身近なものに感じ、図書館のある生活を本のある生活というふうを考えればよいように思う。
- ・転居の関係で、図書情報館が近くなったことも有り、ほぼ1週間に1回出かける。そうすると、色々な発見がある。外に出かけると、多くの人がいるのだなとか、ここにはどんな人がキーボードを叩いているのかなとか気がなる。出かけることはいいことだと思う。
- ・なぜ図書館に通う人になったかという、附属中学の校長を兼任しており、何か読書活動の推進にささやかなことができないかなと思ひ、校長室のドアに、毎週、詩を一編掲げている。最初は詩だけだったが、そこに校長の言葉を一言二言入れている。詩を選ぶとき、インターネットや自分の持っている詩集から選ぶが、インターネットで検索すると内容の半分ぐらい引用の詩に間違いがある。それは、助詞の間違いや漢字の間違いなど、作った人の独特の癖が出ている。原典を確認するのが大切である。そこで、この詩は、どの詩集の何ページから引用したのか分かるようにしている。それは、コピーペーストをしていない証でもあるが、必ず自分で確認している。そうすると、その詩の周りの詩も読み始めるようになる。このきっかけは、週に1回、詩を生徒にプレゼンするという場を自分で用意することで、インターネット、ICTを使い実際の本、メディアを横断するような生活が始まり、図書館が身近になった。
- ・図書情報館に行くと、色々な刷り物が用意されていて、ビブリオバトルのことや、館長さんの読書相談もあり、いろんなヒントがいっぱいある。読書に携わる人は、図書館に足を運ぶといいこととヒントがいっぱいある。
- ・「国際子ども図書館」というのが東京の上野にある。国立博物館の隣にあるが、最近、リニューアルオープンし、新館ができています。ずいぶん広い新しいフロアがある。子ども読書活動の推進に関する情報は、今は一手に「国際子ども図書館」のホームページがカバーし、全国の状況すべてオープンにしている。全国の様子や国の様子をつぶさに見る窓になっている。
- ・本の読むきっかけになるかどうかかわからないが、2020年大学入試が少し変わろうとしている。単なるセンター試験から、AOなり論文とか文章とか、いろんなことで読書が大きなウエイトを占めてくる。入試対策上、本格的に本を読むことと、読書と結びつけていく中で、自分の意見や考えをまとめていくという現実的なものから、読書につながる1つの作用があるように思う。本質的かどうかは別にして、本に接するチャンスだと思う。
- ・それから、環境のことですが、県の読書活動の会議なので、県ということで考えると、子どもが本を読む、読まないに二極化しているのは、子どもの生活レベルで言うと、自分で自分の時間をきちっと管理できないからである。生活時間を制御できないのならば、どこかで大人が時間をキープする必要がある。学校で読書会を45分か50分程度行うなど、物理的な時間を用意することによって、読書のきっかけができるので

はないかと思う。

- ・次に、公共図書館と学校図書館がコラボレーションするという夢のような話だが、読書カード1枚持っていれば、県も市も学校も市町村を跨いで、どこでも本の貸し出しができるというシステムが全県下でできれば素晴らしいと思う。奈良市の場合、ある小学校とある公共図書館が1枚のカードで共有して貸し出しができるようになっていいる。いずれ、ICTの発達で出来るようになるのではないか。
- ・マンパワーのことで言うと、人が大切で、人がいるかないかによって違うのはいろんな調査研究成果で明らかである。学校に図書館司書を配置出来ればよいが、予算の関係もある。ボランティアで賄うか、ある程度有償にするか。教育大で言うと、大学の職員の約2割は特任の教授や時間雇用となっている。県が予算立てをするのも1つのアプローチではないか。いろんな関係団体と折衝が必要かも知れないが、読書に関する先ほどのパーセントの低さを考えると、具体的なアクションをおこすことが必要ではないか。できるところからという時代もあったが、今は教育の機会均等とか学習権の問題もあるので、その辺の所も考えていかねばならない。
- ・県として、キーポイントとなる読書活動推進計画が、例えば、奈良県の子ども読書活動推進計画に絵本を軸とすると、老いも若きも絵本は受け入れ、絵本を軸として、発達段階にアプローチができる。それを窓として小説を読んだり、短編ものを読んだりする読書につなげることができる。広く一般に読書活動推進というムーブメントとして、キーワードを策定するとそこにマグネットのようにいろんなアプローチや発想があり、ネットワークが広がる。
- ・大学では今、アクティブラーニングとラーニングコモンという尻取りのようなことが話題になっている。アクティブラーニングは、次期学習指導要領のキーワードになるが、これは、主体的、能動的、協働的というのが要素となる。一人ではなく協働なので、そのための空間として、ラーニングコモンまたは学びの空間がイメージされていると思う。そこを公共図書館がアプローチとしてどうできるかが課題になるだろうと思っている。そこに推進会議としての試みをする、組織的な営みになるのかなと思う。

【吉田議長】

ありがとうございました。

本日は、委員の皆様から貴重な意見をたくさんいただきました。今後、今日いただいた意見を踏まえ、子どもたちが読書活動に親しむことができる時間の確保や環境の整備、機会の提供等を目的とした事業の検討材料といたします。

長時間にわたり積極的にご議論いただきお疲れ様でした。これをもちまして、平成27年度奈良県子ども読書活動推進会議を終了いたします。

ありがとうございました。